

シーン9

ジユエル・スターズ壊滅記念パーティー 前編 レッド視点

「んー、それじゃあこれでおしまいにしましようか」

「解放でもしてくれるのか？」

「はい、ホワイトさんとの約束ですし」

「……なつ。だが、好都合だ……私は、一人になつてもあきらめない」

「ふふふ、さすがはジユエル・スターズのリーダーですね」

何を考えているかわからないが油断はできない。が、この快樂地獄が終わるかと思うとすこし……

「あれ、信用してない？ それじゃあ、最後の勝負はレッドさんが自分の足で、この建物の出口から出れば勝ちってことで、いいですよ」

「あ、別に罷とかないですよ？ 部屋を出てすぐのエレベータを登つたら1階のロビーですから」

フォビュラスはあっさり、部屋の扉を開けて手招きをする。

「えー、せつかくおチンポ様に『奉仕できると思つたですのに』

「大丈夫、ホワイトはこれから、歓迎会。みんなもおちんちんギンギンにして待つてるから期待しておいて」

「そうなんですか、いっぱい『奉仕頑張ります！』

「みんな…………だと？」

衣装まで変わつてしまつたホワイトはブルーに対して胸を押し付けるように体を預けて、1時間前では考えられなかつたほどに淫倣な笑顔で笑つている。

「えー、レッドさんはもう関係ないからいいじやないですか。あ、出口に向かわずに今からメス奴隸にしてくださいつてお願ひするなら、完全に洗脳した後に紹介しますよ？」

「……そんなことはできない…………」

「あ、ちょっと考えちやいました。いっぱい気持ちよくなれちゃつてお勧めですよ？ ほら、ホワイトさんとかすつごく楽しそうでしょ？」

一瞬、何かが思い浮かんだが、私はまだあきらめるわけにはいかない。まだ、ここを出て……

「な、なんだ……ここは」

エレベーターは何の問題もなくすぐそばにあった。特殊な仕様などないエレベーターだ、地下の内装もどこにある内装だった。そう、たぶん偶然だ、ジュエル・スターズ本部と同じ内装なんてどこにでもある、はず……

「え、普通にエレベーターのなかだよね？」

地下3階から1階まで数秒で到着してしまった。

「1階についたようですね。早く行きましょう！」

開いたエレベーターの扉から見えた光景は当たつてほしくない予想通りで。

「あ、ノノちゃん。早かつたわね」

「え」

どう見てもジュエル・スターズ本部の正面ロビーで今朝ミーティングにいたスタッフの一人が普通に話しかけてきた。それだけならいつもの風景だが、私の衣装が凌辱された後のほぼ裸に近い状態で、他の3人が怪人の正体を隠してもいらない状況ではあまりにも異常だ。

「あー、まだちょっと終わってないんですよ。藤村さんの方は？」

「あれ、そうなの？ 会場のほうは皆集まつて……」

スタッフは当たり前のようにな話を進めていく。「そだつ、と叫びたくなるがあまりの」とでその力もわからない。

「あ、姉さん！」

スタッフと同じように今朝私を送り出したときと同じ笑顔で私の弟、ジュエル・スターズ司令官が……ああ、そんな……

「まさか、ここは……そんな。ジュエル・スターズ本部……だとでも」

「違いますよー、ここはオプト・ムーンの新拠点。ジュエル・スターズ本部だったのはちょうど前の話ですね」

「あれ、姉さんの洗脳はまだなんですか？ 僕もう我慢できなくて……」

「聴……そんな、フォビュラス、貴様まさか！」

「ふふふ、当たり前じゃないですか？ 私、洗脳怪人ですよ。3日前にジュエル・スターズ本部全員の洗脳は終わつてて、ふふふ、朝のレッドさん達を見てると笑いをこらえるの大変だったんですよ？」

「すみません、姉さん。でも、ボク今すごく楽しいんです。怪人になつてみんなを襲つて洗脳するの。今まで、ジュエル・スターズスタッフとしてがんばて守つてきた人たちを犯すの凄く興奮して……ああ、そうだ、今なら姉さんを……あはは、もし姉さんが洗脳されないならボクがもらつていいですよね。怪人らしく襲つて犯して、ああ、とつても楽しみだなあ」やめてくれ、私の弟の顔でいつもの声で、敵……として戦わないといけないなんて！？」

「ぐう、そんな、ん……あ、何！？　なんで……ん、あ、んんん！？」

【ジュエル・レッド(赤壁あかね)　は精神的に傷つくことで快樂を覚える】

心が、あまりの絶望に心が折れそうなのに何だ、この感情は……
「軽くイッちやついました？　ふふふ、さつきの勝負の時の洗脳で『精神的マゾ』が描きこまれちやつてるからかな？　絶望するほど気持ちよくなつちやうんですよ」
ブラック・フォビュラスとその場にいる私以外のみんなが楽しそうに笑う。
「うく、それでも、うあ、まけ、ない。心さえ折れなければ……」

【ジュエル・レッド(赤壁あかね)　は一定の間隔で正義の味方の心を思い出す】

たとえ一人になつても……わたしは……

「あ、そうそう、その首輪外すんでした。でも、その催眠装置の機能つて、イつた回数を力ウントするのと”どんな調教や洗脳でも悪の組織には屈しない”っていう催眠を外付けでかけてただけなんだけど、なんで外したかったんだろ？」
え、なんだそれは……いや、そんな、まさか……
「あれ、言つてませんでしたか？」
あ、あ、あああ……今外したら……

「まあいいじやないですか、はい、外しましたよ？」

「あ」

脳みそからつま先まで電流が走ったように全身が段違いに敏感になる。そ、装置なんてな、あ、だめ、あれ……あ……

「それで、正義の味方のレッドさんはどうします？」

「はーい、みんな今日は集まってくれてありがとー！」

「ここはジュエル・スターズ本部の多目的ホールか？ 檻上に立たされているようだが……う、直前までの記憶が思い出せない。しかも、催眠をかけられているのか、体の自由は効かず、声も出せない。」

「それじゃあ、ご主人様の挨拶は終わったんで、次は私達、元ジュエル・スターズが改めて自己紹介するね」

「思考がうまくまとまらない、ホール内にはジュエル・スターズのスタッフ……3割ぐらいは直立した動物や異色の肌と、怪人の姿になっているのにその周囲は自然に接している。つく、ジュエル・スターズを制圧したというのは本当だったのか……」

「まずは、私。本名、御船ノノ。2か月ぐらい前まではジュエル・ピンクだつたけど、オブト・ムーンに洗脳されて今では立派な洗脳怪人ブラック・フォビュラスやつてます！ あはは、半分ぐらいは知っていますよね。私の洗脳ザーメンで洗脳しちゃつた人達だから」
「ブラック・フォビュラスの姿になつたノノを話題に、周囲は洗脳されたとは思えないほど穏やかな雰囲気で談笑している。それが、逆に不気味だ。

「でも、まあ、ジュエル・スターズつて私が裏切つてるつて知らずに放置して、裏でじわじわと洗脳仲間増やしても気づかない、おまぬけな人たちだつたから仕方ないかな？」

「つく、実際に近くに居ながら気づけなかつた私の落ち度だ……」

「次は、ボクの番だね。人間だったころの名前は八島レン。元ジュエル・ブルーだつたけど、今は改造怪人のカオス・フェンリルだよ！ あはは、ボクもノノに洗脳されちやつた口だけど、みんなも洗脳改造されてとても喜んでるから問題ないよね」

「ブラック・フォビュラスの隣に立つていたブルーが変身、いつもの部分変身ではなく全身を黒い獣のように変化させて、カオス・フェンリルに変わる。

「ボクも、いっぱいスタッフのみんなを襲つて、ボクと同じどうぶつにしちやつて仲間を増やせたからとっても嬉しいよ。これからは街の人も襲えるから皆も一緒にいっぱい仲間を増やそうね」

心の奥底から嬉しそうに笑う元ブルー、カオス・フェンリに会場の怪人達も合わせて笑う。発情した獣のような目付き、下衆な考え方を隠そうともしない下品な目付き、悪の組織から世界を守るという決意に満ちた表情を持ったスタッフは一人もおらず、もう、ここはオプト・ムーンの構成員で埋め尽くされているということを嫌にも思い知らされて……達してしまったが、つぐ、なんで……私は何をされた？

「この姿では初めましてですね。元ジュエル・スターズのジュエル・ホワイトとして活動してましたがこの度、おちんちん様へのご奉仕のすばらしさに気づかせていただきまして、皆様専用のオナホ係として生まれ変わりました栗栖川マリアです。新しいコードネームはラスト・ラフレシア。よろしくお願ひしますね」

さつきから、体が、んくうる！？　おかしい、皆の視線でだんだん体温が上がつて……ん、ふうひ、気分はむしろいい方だが、どうなつているんだ……

「ふふふ、前に信仰していた”神”ですか？　もういいんです、あんな処女房。あいまいなことしか言えないのにこんな気持ちいいこと隠してたなんて、ひどいですよね？　これからは、皆さんのおちんちん様の処理を24時間いつでもさせていただきます。体中どこでもおちんちん様にご奉仕できるよう改造していただいたので、オナホでも精液便所でもいっぱい使ってくださいね！」

スタッフの集団の中に弟を見つけた。ああ、さつきと同じようにまるで獲物を見るような目つきで私を見ている。今まで見たこともない下品な目つきだ。くう、んんん！？　とても最悪な気分なはずなのに……どうして、どんどん体が熱くなっている。

【ジュエル・レッド(赤壁あかね)】

「さて、最後に紹介するのはこちら、ミルク・バニーさん。怪人というよりは特製ミルク・サーバー担当なので、喉が渴いた際にはご利用よろしくお願ひしますね」

「うく、何を言つて……わたしは、ジュエル・スターズのジュエル・レッドだ」

声は出せるようになつたが相変わらず体は直立のまま動かせない……だが、意思が残っている限り悪には屈しない。絶対にみんなを催眠洗脳から解いて救つて見せる。

「元ジュエル・スターズのレッドさんで、す、よ。ジュエル・スターズ創設者の一人で最強の正義の味方、ファンだった方も多いはずですね。いつもの前身タイツな痴女ルックも良いですが、バニースーツもよく似合ってますね。さすがドスケベボディの持ち主」

怒りよりも羞恥心で顔が真っ赤になる。つぐ、意識をしつかり持たないところを催眠に負けるわけにはいかないんだ。

「それで、ミルクサーバーの使い方でしたね。まあ、使用方法は簡単。おチンポをおまんこに突っ込むだけ」

「私は、ま……」

唐突に、背後から私の膣内に凶悪な太さの男性器……んあ！？

【ジュエル・レッド（赤壁あかね）】は男性器またはそれに準ずるものを体内に入れられると性的興奮を得ることしか考えられなくなる】

「んひいぢ！？ あ、あ、あああぢ！？ おちんちんはだめえ！？」

あれ、私は何を考えて、あひいぢ 一突きぢことに、あ、ふあぢ 私は、んんぢぢ！？ あぢだめ、思い出しちや……

「何ですか？ ミルク・バニーさん。もう一度、自己紹介をどうぞ」

あ、ああ、そうだつた……あのとき、ロビーで装置を外された私は考えるまでもなく、その場でブラック・フォビュラス達に土下座してメス奴隸にしてもらつたんだつた……ははは、なんてまぬけな話だ……でも、もうあんな風にひたすら我慢して耐えておもいつきりいけないなんて無理。

「は、はいい！ あ、わたし、ミルク・バニーは、あぢ 元ジュエル・スターズ、んひいぢのリーダーで、ま、まだ、正義の味方のお、心を持つて、い、いますが、おちんちんを、わ、私のぢ？！ くそ雑魚おまんこに挿入されると、ひと突きでえ、はあぢ 、ふああぢ メス墮ちしちやう、けど、んひゅうぢ 負けない、あぢ ゴメンなさい！？ おチンポでずんずん突かれるの、Qスボットごじごしされたりぢ 子宮の入り口こつこつされたりするのだいしゆきなぢ ド変態な正義の味方でしゆみませんんぢぢ！？」

どうせ、みんな、ジュエル・スターズの本部のスタッフも、ホワイト達メンバーも弟まで洗脳されて改造されて、悪の組織に寝返つちやつたんだし、私一人頑張つても意味無いし、おちんちんぢ 入れてもらつたからもう負けちやつていいんだ。いっぱいぢ いっぱいいつちやつてもいいんだぢぢ

「あはは、もう、何しやべつてるかわからないですよ変態正義の味方さん？」

「ひやんぢ！？ だめ、おちんちん入つていると、おちんちんのことしか、あぢ、ああぢ、考えられなくて……」

「しようがないなあ、だらしないミルクサーバーさんの代わりに使い方の説明しちゃいますね」

「くそ雑魚正義の味方兼オプト・ムーン用ミルクサーバーのミルク・バーは約半日おちんちんを突っ込まれなければ正義の味方の人格が強く出てくるようになります。なので、見かけたらみさんの怪人ちんぽを突っ込んであげてサクッと退治してあげてください」

「ひや、ひやいり おちんちんありがとうございます！ 怪人ちんぽ大好きな変態正義の味方をいっぱいこらしめてください〜！」

ブラック・フォビュラスが中出したと同時に乳首から母乳を吹き出す。バニースーツが汚れるけど気にしない、これからは一生ミルクサーバーなんだから……」

「こんな感じで、いじめあげると喜ぶどうしようもないマゾうさぎなのでいっぱい蔑んであげると質のいいミルクを出すのでお勧めですよ？」

ああ、みんなが私を指さして笑ってる。恥ずかしくてみじめでうれしくて気持ちよくて

こんな快楽があつたなんて……見られるたびにゾクゾクしてイくのが止まらない！

「あ、ミルクのお代はこゆーいザーメンを与えてあげてくださいね。中出しでもお口に直接

でも、お弁当にパンパンに詰まつたコンドームを挟んであげても喜びますから。

「ひやいり、お、オプト・ムーンの皆さん、こんなんだらしないミルクサーバーですがご利用よろしくお願ひします……」

乳首から母乳をビュービューって吹き出しながらそう宣言して達するのはとても幸せで気持ちよかつた。

「それじゃあ、ジュエル・スターズ壊滅記念パーティみんな楽しんでいってね！」

「姉さん！」

はきはきとした声、ギラギラとした目線、ああ、ズボンをあんなに膨らまさせて、

「はあ、はあつ、はあつ……」

実の○なのに、○がつながった姉○なのに、守りたかった一番大切な、大切な……正義の味方として、実の姉として、○のつながった弟と交わるなんて許されるはずがないことと、というのはまだ私の心の中にある。あるが、そんなことよりも、あのおちんちんで私の膣をついてもらつて○の精液を溢れるまで出してもらうことを考えると、ああ、凄くゾクゾクしてそれ以外どうでもいいか……

「あ、司令官君。ごめんごめん、だいぶ待たせちゃつたけど、どうぞ思う存分楽しんで」「もう、ほんとに待たされたんですよ。今日も、姉さんに合わない時は適当なスタッフさんでヌいていたのにこんなにパンパンになつた大変だったんですから」

「ズボンからはみ出しそうなぐらいになっちゃって、あは、オナニー覚えたて男子じゃないんだからって、年齢的にはあまり変わらないのかな？ レッドさんも何か言ってあげてくださいよ」

目の前の怪人に恥も外聞も〇のつながった姉としての尊厳もなく、オチンチン大好きなメス奴隸ミルクサーバーとして口を開く。

「ご使用ありがとうございます。その素敵な怪人ちんぽでドスケベミルクサーバーにいっぶぱい精液注いでいっぶぱい楽しんでくださいわ」

だつて、今は精液でミルク出すオプト・ムーンの備品だから、問題ない。もう我慢しなくてもいいんだから……

「楽しinでます？ レッドさん、あ、今はミルク・バニーさんでしたね」

「あは、あははは、おちんちん、いっぶぱいずぽずぽしてもらつてとつても楽しいです！」弟のおちんちんに抜かずに4回ほど濃ゆい精液を出してもらつたあと、どこかで見た顔の怪人に声をかけられた。ああ、今朝パーティーの準備がといつてたスタッフの面影がある。

「よかつた、みんなで頑張つてパーティの準備したんですよ」

「あ、パーティーつて、ん、んん！？」あひい、……このこと、ん、あ、あああ！？」

あはは、今思うとあの時ホワイト以外全員心の中で私達のことを笑つていたのか……そういうだけでゾクゾクとした暗い快樂が全身を駆け巡つてイつてしまふ。

「そうですよ、うんうん、楽しinでいるみたいで嬉しいです」

「そういつて、スタッフは私の胸を思いつきりつねる。

「んひいいいい！」

ミルク、私のだらしないおっぱいからいっぶぱいドスケベミルク出ちやう。弟の精液から作つたドロッソロのミルクいっぶぱい出すの気持ちいい。

「ずいぶん、メス臭いミルクね。それに、ドロッとしてて……ひいうん、ふあ、ひとくちのんだだけでイッちゃいそう。これ、普通の人が飲んだら一発でメス奴隸に洗脳されちやうんじや。さすが、元ジュエル・スターズ製のミルクサーバーですね……いっぶぱいのんだら胸大きくならないかな？」

「えー、さすがにここまでだらしないおっぱいはいいかな？ でも、ミルクの方はとつてもエツチな味で私は好き。そうだ、私は1リットルくらいもらつて妹二人に飲ませて家で楽しむ用のミルクサーバー作っちゃおう」

「あ、それいいね。私も、弟に飲ませてみよう。だめだったら、お隣の娘さんでいいかな？」

ああ、この洗脳ミルク、これから何も知らない一般人に「ぐぐく飲まれてみんなドスケベミルクサーバーに変えちやうの、想像するだけでイッちゃいそう。

「ああ、姉さんの雌穴、すつゞい気持ちいい！ 何回出しても飽きないです！ あはは、姉さんの下のお口もじゅぼじゅぼ、ぐちゅぐちゅってとってもおいしそうな音立ててボクのおちんちん味わつてます！！ 帰つてからも家でもどこでもボクのおちんちんで喘がせてあげますね！」

「ひやいり！ が、がんばりますうるさい！ わたし、ミルクサーバーとして、怪人の皆様にドスケベミルクいっぱい出して、ふうんり！？ あ、ああり、いっぱい飲んでもらつて、よ、夜は、聴の、お、おちんぽ、ケースうとして、務めさせていただいてえり、ひやんり！？ あひいり！？ ダメダメ正義の味方兼ミルクサーバーだけど、いっぱいかわいがつてくださいりり！」

「こんなになつてもまだ正義の味方続けるつて、もう、みんなのおもちゃ専用でいいんじやないです？」

「んひいり！？ あ、ああ、だつて、んん、せいぎのみか、た、だつたら、怪人様のおり！？ みんなにおちんちんで……あり、ひうりり、いっぱい、やつづけても、らえるか、らあ……」「っぶ、姉さんとつても情けなくて、かわいいですよ。じやあ、お望み通り、怪人に改造された実の弟のおちんちんで懲らしめてあげますからね」

「んあり！？ んほお！！？ 怪人ちんぽ、勝てないり！？ しゅうじいのりり！？？」

「あ、じやあ、私は前から、ドスケベ正義の味方にふたり怪人ちんぽで攻撃してあげます。ミルク・バニーさん、いえレッドさんも物欲しそうに見てましたしね」

「んぶう！？ ん、んん、れろ、んちゅり……」

「あはは、ミルクいっぱい絞つてあげますね。それ、ビュービューフリーコードーい洗脳ミルク出しましよう。あとで、何も知らない妹たちに飲ませた時の反応が楽しみ」

こうして、この日ジュエル・スターズは完全に壊滅した。



シーン11

ジユエル・スターズ最終報告書3

最終調整も完了し、本日をもってジユエル・スターズはオプト・ムーンの傀儡組織として活動予定である。

活動内容としては元ジユエル・スターズの4人の上級怪人（一部は洗脳素材製造装置として使用予定）を軸にメディア、治安保持組織、行政組織などの国の上流を掌握、また、同時に民間でランダムに抽出した人間を洗脳してオプト・ムーンの潜在的構成員に作り替える活動を行う。

ジユエル・スターズはこれらの活動の隠蔽、場の確保などの補助に活用する予定である。民間への浸透は活動拠点の街、関東、日本全域と進める予定。詳細は添付した計画書を参照のこと。

また、自然発生する正義の味方候補の対処も元ジユエル・スターズ本部を用いて本覚醒する前に洗脳、処理を行いオプト・ムーンの上級怪人に改造できるように作業フローを作成中である。